

古典の学習指導における新たな文化の創造

— 高校演劇作品「黒塚 Sept.」を手がかりとして —

東京学芸大学附属高等学校 浅田孝紀

目 次

1. はじめに	108
2. 「言語文化教育」の射程	108
3. 高校演劇作品「黒塚 Sept.」について	109
4. 実践の概要	110
4. 1. 授業実施の条件	110
4. 2. 授業の実際	111
4. 3. 各課題のねらいと評価について	113
5. 今後の課題	114
【資料1】「黒塚」の脱構築に関する生徒の小論文例	114
【資料2】「新たな文化の創造」に関する生徒の作文例	115
[注]	116
[参考・引用文献]	116

古典の学習指導における新たな文化の創造

— 高校演劇作品「黒塚 Sept.」を手がかりとして —

東京学芸大学附属高等学校 浅田 孝紀

1. はじめに

小稿は実践報告を目的とする。古典の教材価値の一つを文化の継承や創造のために資するとする見解は多いが、実際に文化の「創造」を意識した実践は存外少ない。たとえば「枕草子」を読んだ後でこれを真似て随筆を書くとか、俳諧を学んだ後で自分でも俳句を作るなどは、比較的よく行われるものであるが、「国語科教育」であるがゆえに、作られるものが言語作品しか意識されていないことが多い。しかし文化の創造という場合、その「文化」の範囲は広い。小稿では、国語科の授業の枠の中で、高校演劇部の活動から生まれた作品を用いつつ、言語作品にのみ偏らない文化の創造に力点を置いて実施した授業の一端を報告する。

2. 「言語文化教育」の射程

ひところ古典教育意義論が盛んに議論された時期があった。浅田孝紀（1992）は昭和30年代以降の古典教育意義論の状況を整理する中で、「文化遺産の理解や知識等を強調し、あるいはその享受や継承を掲げるもの。」を一つの類型として提示した。同稿は筆者個人の立場を極力排除し客観的な事実を抽出することに務めたものであったが、その最後で「古典教育」の大部分を「言語文化教育」として位置づけるという考えを述べ、その後は浅田（2000）で、「全ての言語教育は言語文化教育である」という視座の設定を提唱した。同稿も事実の抽出を意図しており、伝統文化の価値を強調したものではない。ただし、この視座を設定することによって、初等教育段階から高等教育段階まで、言語文化全体を統一的に捉え、その全体の中で教育内容を決定していくことが可能になるとした。

ここに筆者の個人的な立場を加えるならば、筆者はこれら言語文化に関する価値を重視する者であり、国語科の学習指導の柱の一つとして常にこれを意識しながら実践を行ってきた。しかし古典指導の分野においては、文化遺産の「享受や継承」は日常的におこなわれていても、その先への取り組みはあまり実践できずにいた。「その先」とは、「新たな文化の創造」である。

つとに西尾実（1951）は、次のように述べている。

言語生活の発展は、その完成段階としての文芸・哲学・科学等、言語を契機とした専門文化を形成する。その意味で、これらを特に言語文化と呼んで、それ以外の、すなわち、狭義の言語生活と区別する考えかたもあり得る。

つまり「言語文化」は言語生活の「完成段階」というわけである。そして文芸作品の享受としての「鑑賞」について述べる中で、

……鑑賞は、単なる享受と印象に止まらないで、何らかの行きかたを發展させ、それらを推進する。あるいは知的作業としての解釈・批評へ、あるいは感想へ、あるいは朗誦・朗吟・朗詠等の音楽的演出へ、あるいは動作的または総合的な劇的演出へ、あるいはシナリオ化・脚本化をはじめ、詩歌や物語や絵画・彫刻等の制作へというように、材料により個性によって、同一作品の鑑賞が、さまざまな發展形態をとる。その發展形態は、あくまで個性による決定で、学級を画一的に規定するわけにはいかぬ。鑑賞からの發展としての作業こそ、個人差を基調とした学習でなくてはならぬ。

と述べており、かなり早くから言語文化にとどまらない「発展形態」に関する見解を披瀝していた。この西尾の広い視野に学ぶ必要性は大きい。

また藤原与一（1963）は、論文「文化創造と国語教育」の冒頭部分でこの題について触れ、

……じつは、この方向の国語教育が国語教育の終局のものであらうと考えてきた。

国の文化を拓く国語教育とは、一国の文化を開拓し創造する国語教育というつもりである。すぐれた国語生活者（精神生活のよい方向をしつけられた国語生活者）を養成することができたら、もはやそれが、国の文化の創造を理念とする国語教育の成功ではないか。一国の文化を産む活動のだいじさを、言語生活のうえで自覚させることができたら、「文化創造の国語教育」はできたことになると思う。

と述べて、国語教育を文化の創造につなぐことの重要性を強調している。藤原はこれを国語教育の「終局のもの」としており、西尾の言う「完成段階」と同様の位置づけを行っているといえる。

このように「新たな文化の創造」は古くから言われながら、国語教育の中ではやはり言語作品を作ることにほとんど限られてきた。筆者自身も、古典を鑑賞した後でそれを題材に言語作品を作る自由研究などを課することは従来からあったが（浅田1995）、生徒からの提出物は結局感想文や調べ学習などのレポートになってしまう場合が多かった。しかし、言うまでもなく「文化」の概念は「言語作品」ととどまらない。そして将来の文化の担い手である学習者たちは、あらゆるものから影響を受け、あらゆる種類の文化を創造していく可能性があり、むしろそれが自然であらう。これを国語科の枠の中で、かつ言語作品に縛られずに展開していく工夫が必要であるとと考えてきた。すなわち、「言語文化教育」の射程はかなり広いと考えているわけである。

3. 高校演劇作品「黒塚 Sept.」について

こうしたことは考えつつも、現実には日常の授業に時間的制約が大きく、そのうえ高校1・2年生の途中段階では学習済みの古典作品が少なく、その扱われかたも断片的なものがほとんどであるため、実践には踏み切りにくかった。やはり対象学年は高校3年生が実施しやすい。ただし勤務校では3年生の古典は選択科目であり、各自の志望大学を意識して、主に文科系志望者は古文3単位・漢文1単位の「古典+古典講読」、理科系志望者は古文1単位・漢文1単位の「古典」（2年生からの増単位分）を履修するが、後者は古文が週1時間であるため教科書以外のことをやっている時間はない。やるなら前者であるが、こちらは古文3単位のうち概ね2単位分を『源氏物語』の講読に充てることになっている。そして、各講座には3年生8学級の全クラスから数名ずつの生徒が集まってきて授業を受ける、混成の生徒集団である。何より受験生であるため、特に2学期以降は単元学習等を大がかりに組むことが躊躇される。そのため、1学期のうちにできる発展学習を、主に『源氏物語』との関連で扱えないかと模索していた。

ところで、筆者は部活動では演劇部の顧問を務め、東京都高等学校演劇連盟や関東高等学校演劇協議会の役員も務めている。その関係で、2010年1月に長野県東御市でおこなわれた第45回関東高等学校演劇研究大会（関東大会）へ出向いて各校の上演を観劇していた際、強く感銘を受け、かつ内容面でも国語教師として興味を持った作品があった。それが「黒塚 Sept.」（くろづかセプテンバー）である。

「黒塚 Sept.」は群馬県立前橋南高等学校演劇部による上演で、作者は同演劇部顧問教諭の原澤毅一氏。題名の通り謡曲「黒塚」（安達原）をモチーフにしたものである。筆者はその少し前に原澤氏と知己になる機会に恵まれたため、この上演を楽しみにしていた。もちろん内容は上演を観るまで知らなかったわけであるが、原澤氏はこれ以前にも謡曲を題材にした脚本を2本作っていたため、上演前から強く興味を惹かれていた。そして実際に観ると極めて優れた傑作であり、筆者がこれまで観てきた高校演劇部の大会における上演（以下「高校演劇」と称する）の中でも特に強い衝撃を受けたものであった。この作品はこの年の関東大会で最優秀賞を受賞して全国高等学校演劇大会（全国大会）に推薦され、かつ全国大会でも最優秀賞を受賞して、東京の国立劇場で行われる

「全国大会優秀校公演」でも上演し、NHKのBS-2「青春舞台2010」で全編が放映された。¹⁾

謡曲「黒塚」の概要はここに述べるまでもないであろうが、念のためごく簡略に記しておく。登場人物は、前ジテが老女（後ジテで鬼女になる）、ワキが山伏（東光坊祐慶）、ワキヅレが同行の山伏、アイが随行の能力である。諸国巡礼の旅に出た熊野の山伏祐慶とその一行は、陸奥国安達原で老女の住む小屋に一夜の宿を乞う。老女は自分の身の上を嘆きつつ語り、杵杵輪（糸車）で糸を繰りながら歌を歌う。夜更けに老女は、自分の留守中に寝所を覗かないように言い、薪を集めに外へ出る。しかし能力が寝所の中を覗くと大量の死体があった。山伏一行はこの老女が黒塚に住む鬼だと悟って逃げ出すが、鬼女は正体を知られ憤怒の形相で追ってくる。山伏は鬼女を調伏し、鬼女は自分の姿を恥じて去る。前ジテの老女は、『源氏物語』の六条御息所の零落したイメージを重ねられており、『源氏物語』との関連はつけやすい。そこで、『源氏物語』からの発展学習に、謡曲および「黒塚 Sept.」を用いることを発想した。

「黒塚 Sept.」は、2009年の夏、新型インフルエンザが流行し、全国的に休校が相次いだ頃に書かれた作品である。以下、その概要を記す。舞台は「ぶっちー」と渾名される女子高校生の自室。彼女は演劇部に所属しているが、学校はインフルエンザのため9月になっても休校が続いており、演劇部の大会に向けての練習ができない。そこで彼女の部屋で大会出場の準備をすべく、部活の友人（男子同学年「かに」、女子同学年「なっちゃん」、女子後輩「うっしー」）が集まってくる。ぶっちーは女子らしからぬボサボサ頭で、部屋の中は非常に汚く、また部屋には糸車がさりげなく置かれている。ぶっちーには「かずちゃん」という想像上の友達があり、周囲の人物もこのぶっちーの妄想に合わせて話をしている。「黒塚」を下敷きにした台本を作ろうという相談を始めるが、時折ぶっちーの弟が無言で部屋に入ってきて漫画本を取って出て行くシーンが入り、その際は友人たちがストップモーションになって動かなくなる。弟が出て行くと人物たちはまた動き始めるが、ぶっちーが思いを寄せるかにが、なっちゃんと二人で買い物に出かけたとき、うっしーが「あの二人、いつから付き合っているんですかね？」などと言うと、舞台上は照明と音響が怪奇的な雰囲気に変じ、ぶっちーが回す糸車の糸でうっしーが首を絞められているシーンが入る。また、二人で買い物に行ったはずが、かにだけ帰ってくるなどして、一人ずつ人物が減っていく。やがてラストに近いシーンで、再び怪奇的な雰囲気の中になっちゃんが現れ、「ぶっちー、部屋片付けなよ。この部屋、やばいよ。」と語る。そして弟がまた入って来るが、その際、彼女の部屋の扉には「南無妙法蓮華経」などと書かれたお札がたくさん貼られている。ぶっちーは弟を罵るが、弟は姉に「学校行けよ」という一言だけをぶつけて去る。一人になったぶっちーは虚空を見つめ、やがて笑顔で「あ、かずちゃん」と呼びかけたところで幕となる。この作品では、現実とは弟の入ってくる場面のみであり、それ以外は不登校になっているぶっちーの妄想である。心の中に鬼を抱えてひきこもっているぶっちーは「黒塚」の鬼女。友人たちはこれまで鬼女の犠牲になった被害者に該当するが、同時に旅の山伏や光源氏・葵の上に近い位置を与えられてもいると思われる。そして、弟が鬼女を調伏する祐慶にあたる。「黒塚」を下敷きにしながら、現代の高校生の心の闇を表現し、卓越した演出で言いしれぬ恐怖感を観客に与え、同時に鋭い説得力を持つ作品である。この作品なら国語の授業で用いる価値が高いと考え、上演ビデオを教室で見せることを念頭に置いて授業を構想した。

4. 実践の概要

4. 1. 授業実施の条件

①単元名 「『源氏物語』と『黒塚』をめぐる」

②使用教材 教科書：『高等学校古典講読 源氏物語 枕草子 大鏡』（三省堂 2004年3月検定済）

プリント：謡曲「葵上」「黒塚（安達原）」（小学館『日本古典文学全集34 謡曲集二』より）

プリント：「『脱構築』について—『源氏物語』と謡曲を軸に一」（インターネット上のフリー百科事典 Wikipedia の「脱構築」のページから一部引用）

能楽 DVD ビデオ：『能楽名演集 黒塚 葵上』（NHK エンタープライズ）

高校演劇大会撮影ビデオ：「黒塚 Sept.」

③実施期間・回数 平成23（2011）年6～7月 4回（『源氏物語』自体の講読に要する時間は含まない）

④対象 2011年度高校3年生選択古典講座2クラス（主に文科系志望者対象講座）²⁾

この2クラスはそれぞれ古典A・古典Bと称し、他教科とあわせた選択パターンに似た生徒で集団が作られており、能力別等の特別な編成は行っていない。古典Aは39名、古典Bは37名である。男女比も考慮に入られていないが、古典Aは男子13名・女子26名、古典Bは男子16名・女子21名で、文科系であるため若干女子の方が多い。

⑤使用教室 普通教室（プロジェクターとスクリーンが常備されている）

⑥その他

この講座は3年生対象であり、全員が大学進学希望であるため、日常的には教科書の全文訳を毎回課し、授業では生徒の作ってきた訳文の確認を中心にしながら、発問－応答型の講義形式で展開している。2年次の「古典」から継続で使用している教科書がもう1冊あり（東京書籍『古典 古文編』）、『源氏物語』を中心にしながら、1単位分程度は別の作品も取り扱うことになっている。平成23年度は、年度の最初に『古事記』「倭建命」を扱い、それ以降は『源氏物語』に移行し、今回の課題に関連して主に「廃院の怪」（夕顔）と「車争ひ」「物の怪の出現」（葵）を扱いつつ、必要に応じ他箇所も参照した。

4. 2. 授業の実際

<第1時>

前時までに『源氏物語』の上記の3箇所を読み終えているが、この3箇所はすべて六条御息所に関わる逸話となっている。夕顔が死んだ廃院で幻のように見えた女は、古来六条御息所のイメージで捉えられてきている。また、葵の上との車争いで恥辱を受けた六条御息所は、生き霊となって葵の上をとり殺す。これらの教材の内容を受けて、まず謡曲「葵上」を読み、『源氏物語』との違いを考えさせた。「葵上」のプリント教材は、小学館の全集本からのものであるため、全文訳がついており、これを参照すれば理解にはさほど困難は伴わない。そこでこれは各自に読ませ、あらすじをごく短くノートにまとめさせた。謡曲「葵上」には葵の上本人は登場せず、一着の小袖で葵の上を表現しており、ここに六条御息所の怨霊が襲いかかるが、最終的に怨霊は小聖に調伏され、成仏していく。この話の展開を理解したうえで、これが『源氏物語』を原話にした再構成であることを認識させた。その際、やや大袈裟になるが「脱構築」という概念をプリントによって与え、芸術作品などの場合は本来的な意味の「脱構築」というよりは、「再構成」とほぼ同義であるとした。わざわざ「脱構築」という考え方をもち込んだのは、これが現代文の評論などで時折目にする用語であり、この学問的な用語を提示することで、生徒の知的好奇心を喚起しうると考えたからである。いわゆる進学校の生徒は、易しく説明するばかりではすぐ飽きてしまうので、若干難しい考え方を提示したうえで、わかりやすい形にして授業で用いることが有効である場合が多い。今回もそれを企図し、あえて「脱構築」という用語を用いた。

<第2時>

この時間は、まず能楽のDVDビデオで「葵上」の一部を、途中はかなりの早送りをしながら視聴させた。橋懸かりに登場した役者が中央まで来て言葉を発するまでいかに長い時間をかけていたか、小袖一着で表されている葵の上が実際の舞台上ではどのようなになっているか、シテである六条御息所の面が変わって般若になる時の変わり目、それに最後の調伏のシーンを、説明を加えながらそれぞれ2分程度ずつ再生して見せた。全編をきちんと見せなかった理由は、一つには上映のための著作権処理を行っていなかったこともあるが、現在の高校生は能楽の極めてゆっくりとした動きや言い回しに適應できず、見せてもほとんど寝てしまう。それでは意味がないの

で、ごく短くさわりのみを知らせる形で能楽「葵上」を経験させ、舞台のイメージを作らせた。

続いて、今度は謡曲「黒塚」のプリントを配布し、前時同様各自に読ませ、ごく短いあらすじをノートにまとめさせた。そして、詞章中の地謡に「さてそも五条あたりにて、夕顔の宿を尋ねしは」とある箇所を取り上げ、古来ここより「黒塚」の前ジテである老女は、六条御息所が零落した姿を連想させてきており、葵の上をとり殺した六条御息所と、旅人を取って食う鬼女のイメージが重ねられていることを述べ、これも『源氏物語』からの脱構築と解することが可能であると説明した。そして、「今回はこの『黒塚』を脱構築したと言える高校演劇のビデオを見てもらいます。」と告げておいた。

<第3時>

「黒塚 Sept.」のDVDビデオ視聴。高校演劇の大会には、1校の上演が60分以内というルールがあり、この作品も約60分ある。そのため、5分早く授業を開始し、5分遅く終わるという指示を前回の終わりに行っている。この日は授業開始以前に筆者が教室でDVDのセッティングを行う間に、生徒に以下の課題プリント（実物は縦書き）と原稿用紙を配布させ、上映直前に課題①の指示を行った。これについては授業では書く時間をとらず、次回までの提出とした。

三年古典 AB (古文) 学習課題 「源氏物語」と「黒塚」をめぐって

まずこれから、平成二十二年八月の高校演劇全国大会最優秀賞受賞作品

「黒塚 Sept.」(くろづかセプテンバー)

群馬県立前橋南高校演劇部 上演 原澤毅一 作(顧問創作)

を視聴してもらいます。このお芝居は、平成二十一年の夏、当時新型インフルエンザの流行で全国的に休校が相次いでいた頃に作られた作品です。これを見た上で、次の二つの課題に取り組んでください。

【課題① 「黒塚 Sept.」について】

すでに配布したプリントを参照しながら、現代演劇「黒塚 Sept.」は、謡曲「黒塚」をどのように脱構築したものと考えられるか。あなたの考えを八〇〇字以内で論じなさい。なお、この場合の「脱構築」とは、プリント「『脱構築』について—『源氏物語』と謡曲を軸に—」でいう2の①の意味であり、「再構成」と同義に考えて結構です。

提出 古典A=七月一日(金) 古典B=六月三〇日(木) いずれも授業時

【課題② 新たな文化の創造について】

古典学習の重要な意義の一つに、「伝統的な言語文化を継承し、新たな文化の創造に寄与する」ということがあります。考えてみれば、古典は現在に至るまで、様々な形で新たな文化を生み出してきました。たとえば『源氏物語』や『平家物語』をとっても、その後の物語文学はもちろん、室町時代には能(謡曲)の素材となり、江戸時代には浮世草子や人形浄瑠璃・歌舞伎に影響を与え、近・現代でも直接・間接の影響を受けたものが少なくありません。

「黒塚 Sept.」は、古典である謡曲「黒塚」から直接の影響を受けて継承し、新たな文化を創造した作品の一つであるといえます。もちろん、戯曲にするばかりが文化の創造ではありません。あらゆる分野で古典文学を取り入れた文化の創造が可能です。そこで、第二の課題です。

あなたがこれまで学んできた古典文学作品を素材にして新たな文化的な創作作品を作るとします。その場合、どの作品を用いてどのような作品を作ろうと考えるか。その構想を八〇〇字以内で説明しなさい。なお、素材にする作品は古典文学であれば何でもかまいません。また、構想する作品のジャンルも、何でもかまいません。演劇はもちろん、小説や詩歌などの文芸作品、音楽、美術、工芸、書道、漫画、ダンス、映画、ゲームなど、あらゆるサブカルチャーを対象として結構です。ただし、次の条件を守ること。

条件 ①あくまで言葉で構想を説明すること。

②たとえば「源氏物語」を脚色するだけといった類の、原作をそのまま違う形に変えるだけのものは不可。

③友人と相談して合同で構想をまとめるのも可とします。ただし、課題の提出は個別に行ってください。

④もし作品そのものを作りたければ作ることも自体は大歓迎ですが、八〇〇字の構想を提出することを前提とします。これを出さずに作品だけ出すのは不可。

提出 期末試験の答案返却時まで。

(本当に作品自体を作る場合は、いつまでかかって作ってもかまいませんが、自分に許された時間との相談にしてください。)

60分弱の上演ビデオなので視聴後は既に休み時間になっていたのであるが、生徒たちには各自の受け止め方をめぐって盛んに話をする様子が見られた。

<第4時>

まず課題①を回収。これは「論じなさい」という指示にあるとおり「小論文」の課題としたものである。この課題を与える前にも小論文の書き方に関する指導はおこなっているが、本校では国語科はもちろん各教科で論文形式のレポートを書かせる課題が多いため、概ねしっかりとした文章が書けていた。「黒塚 Sept.」の解釈について唯一の正解を求めたわけではないので、筆者が意図した内容の記述になっていなくても、よほど外れた内容でない限り論理的に述べられていればよしとした。(提出された小論文の例については【資料1】参照。)

その上で、課題②に取り組みさせた。この時間は1学期の期末考査前の最後の授業である。課題②は、「自分一人で取り組んでもよいし、席を移動して友人と共同で行ってもよく、その人数も自由。」とした。結果として1名で取り組んだ者と2～3名で取り組んだ者が半数くらいずつになったが、それ自体にはこだわる必要はないと考え、生徒の自由に任せた。この課題の提出期限は、期末考査終了6日後の答案返却のみの授業時(古文は15分間)に提出するものとした。(提出された作文の例については【資料2】参照。)

4. 3. 各課題のねらいと評価について

課題①には2つのねらいがある。第一は、2つの作品を比較しながらその特徴と違いを理解し、論理的に述べる力をつけることにある。これにより、文章表現力とともに深く考えて鑑賞することのできる素地を身につけることを目標とした。第二は、「脱構築」という概念を用いつつ、古典に材を取った現代の作品がどのように再構成されているかを意識し、これに基づき自ら新たな文化を創造する力を養うことにある。この課題①をやったからこそ、課題②が充実した内容になると考えられるからである。

課題②は、今回の実践の眼目である。実際に古典を基にして新たな文化の創造を志向することをねらいとしている。ここでは上の課題プリントの指示にあるように、あらゆるサブカルチャーを対象としてよいとしたが、これは西尾(1951)でいう「発展形態」を意識したものである。ただし、実際に絵を描くとか作曲するとかゲームを作るなど、国語科の課題としては馴染まない成果物を提出させることは難しい。まして、演劇やダンスを実際に上演するなどには不可能である。そこで、「どのような作品を作るかの構想を言葉で説明させる」という指示にした。これにより、国語科の課題として成立させ、かつ非言語的なものを構想する場合でも言語化して説明するという比較的高度な活動になり得るからである。提出されたものには、数としては「現代小説を書く」ものと「現代戯曲を作る」ものが多かったが、これらは古典文学を原作としてその現代版を作るという点では同様のものであり、800字説明もあらずじを述べれば済んでしまうため、やや平凡な印象を受ける。一方、美術のコラージュや創作ダンス、フィギュアスケートの演技などを構想した作品には、かなりの創意工夫と言語化の際の苦

心の跡が見られ、興味深いものとなった。

評価については、課題①は論理的に、課題②は分かり易く述べられたものが提出されていればよしとして、1学期の成績を出す際に平常点に加えた。内容によって点数に差をつけることはしていない。ほとんどの生徒がきちんと提出したので、大きな差がつくものにはなっていない。

5. 今後の課題

最後に、今後の課題を2点挙げておきたい。

まず、高校演劇の上演ビデオを使用した点について。筆者自身が演劇部の顧問を務めているため、その縁で「黒塚 Sept.」を知り、その映像を用いることができたのは最大の幸運であった。同様のものは、たとえば三島由紀夫の『近代能楽集』によるプロの上演もあり、費用をかけて著作権処理を行えばこれも使用可能である。しかし、プロの作品の場合は概ね上演時間が長く、数回に分けて見せるかダイジェストで見せるかしなければならぬため、視聴するときの効果が著しく落ちるのが欠点である。これに対し高校演劇は60分以内であるため、少し無理をすれば1回の授業で見せきれる点、有効である。しかし、「黒塚 Sept.」のような優れた作品はなかなか現れない。こうした優秀な作品をいかに発掘し確保するかは大きな課題であろう。

次に「教科の壁」がやはり大きいという点について。「新たな文化の創造」というときに、それが言語文化の創造に限らないことは言うまでもないが、「総合的な学習の時間」でもない限り、国語科の中で生徒に要求できる課題は、常識的には言語を伴うものに限定されるであろう。今回の、作品の構想を言葉で説明するという課題は、ある程度はこの制約を解消しうるものである。しかし、もっと教科横断的な課題が出せれば生徒の活動の幅が広がるであろう。他教科との連携によって言葉での説明を超える活動ができるようにする方向を模索したい。

【資料1】「黒塚」の脱構築に関する生徒の小論文例

① A・T

謡曲「黒塚」の脱構築には三つの段階が存在する。第一段階で元の作品に則した要素が取り上げられ、第二段階で元の作品と少し異なる要素、第三段階で完全に異なる要素が付加されている。まず第一段階において、両作品に共通するのは、主人公の女の恋煩いから生じた怨恨が、関わった人の命に影響を与えるという主題である。他に元の作品と共通する要素として主人公の家が人里離れた所にあり、黒塚を彷彿とさせることが挙げられる。

第二段階において付加された要素の特徴は可視化、可聴化である。主人公の家が灰色で黒い屋根であることや鬼の寝所に札が貼ってある設定のもと、終盤で主人公の部屋の扉に札が貼ってあることが可視化である。また主人公の心情の変化に伴って天候が変化し、蝉や虫の声の種類も変化していることが可聴化である。糸繰り機を繰りながら歌うことはなかったが、その代わりとして音楽をかけ、主人公の心情を示している。

第三段階において重要なのは、場面設定の変化と配役の変化である。主人公が黒塚の鬼に相当すると仮定すると、私たちは黒塚の中から話を見ていることになる。主人公が嫉妬している、同じ部活で恋仲の二人は光源氏と葵上であり、後輩は能力、弟は祐慶に当たる。マンガを取りに来る弟は黒塚に現れる僧で、最後には調伏されるのである。元の作品と大きく異なっている点は、主人公の家、つまり黒塚に来た人の数が減っていく点と、主人公が鬼女ではなく、精神を病んだ少女である点だ。元の作品では実体を伴わない六条御息所の靈魂や鬼が主人公であるが、脱構築によって実体を伴った、精神を病む少女に変わっていることによって、より現実味が増しているのである。謡曲「黒塚」は鬼を調伏する仏教の称讃が主であるが、主人公を私たちにより近い存在として位置付け直すことで、私たちの身近にもそのような鬼が潜んでいて、誰もが鬼になり得ることを示唆している。

② Y・H

「黒塚 Sept.」は、謡曲「黒塚」を解体し、その中から要素を選び、自分たちの日常生活の中に組み入れ、再構

成したものであると考えられる。

「黒塚」で印象的なのは、悲しい自らの身を嘆き糸車で糸をつむぐ女鬼、無残な死体で溢れた、劇中では札が貼られたことになっている鬼の寝室、絶対に部屋をのぞくな、という女の言葉だろう。劇は新型インフルエンザで夏休みの後も学校が始まらず、鬱々とする副部長から始まる。長い髪は乱れ、部屋は物で溢れて汚い。一人ずつ相談のために部員が集まるがしばしば不自然な間が入る。副部長と後輩が二人になったときの首に糸をまき糸車を回して後輩が苦しむ場面や、部長と聞く音楽が叫び声になる場面、一人ずつ消えてゆく部員、最後部屋の扉に貼られた札、弟の「学校行けよ。」の言葉。これは全て黒塚の要素をもとにしていると考えられ、副部長と女鬼を重ねていると考えられる。乱れた髪と異和感、糸車や叫び声は不気味な鬼を表し、乱雑に置かれた多くの物、汚い部屋は死体で溢れる寝室を想像させる。札に言及することで視覚的にもそれを感じさせ、外と隔離されているようにも感じさせる。「学校が始まれば」と言いながら「学校行け」と言われる矛盾は自らの身を嘆きながらも人を襲う女鬼と重なり、一人ずつ消えてゆく部員は「昔は華やかだった」と語る女鬼の、今の状態となるまでを暗示したものではないだろうか。

このように、「黒塚 Sept.」では現代の日常の中に謡曲とつながる部分を見つけて取り入れている。変わってしまう自分や世の中を憂いながら、人間として変わらない心の深層も感じさせ、一人の人間の中にも相反する感情を垣間見ることができる。つまりこの作品は、「黒塚」を解体し、要素を自分達の日常生活に取り込むことで変化の中に不変を、不変の中に変化を見いだそうとしたものと考えられる。

【資料2】「新たな文化の創造」に関する生徒の作文例

① M・I

古今和歌集仮名序を題材とする。生きとし生けるものがその生命を謳歌し、紡がれて重なり合う歌声が天地を、鬼神を、そして男女の運命を動かしていく幻想的な世界を、創作ダンスで表現する。

初め舞台中央、混沌とした光の渦の中に一人の少年または少女。中性的で着物風の衣装をまとっているが、変形してところどころ破れ、植物がデザインされている。おもむろに笛を取り出して吹き、その鮮やかな音色とともに照明は明るいスポットライトになる。少年は全ての生命、笛は声、歌、言葉の象徴である。この中のもやを歌に昇華させたとき、舞台上の世界は広がり、動き出す。「やまと歌は」前半を笛を吹く間に朗読し、うぐいす、蛙の声をきっかけに穏やかだが力強さを秘めた音楽が聞こえだす。少年は常に舞台上を渡っていく。

舞台上手・下手に二枚ずつ設置した身長ほどのスクリーンで、様々な動物の手影絵を映し出す。近づけておいた光源を離していき操る人間と同化させた後、人間が舞台上に飛び出していく。四ヶ所でそれを繰り返し、次々に集まって来て低く伏せ、全体で大きな塊となる。大地、海、母のイメージ。絶え間ない笛の音と音楽に合わせて波打ち、盛り上がり、なだれをうって砕け散る。音楽は速く、激しくなり、太鼓が鼓動のように響く。鬼神、父をイメージした力強く躍動感ある群舞。天地の群舞は曲線と流れを強調し全体でカノンの動きを多用するが鬼神の群舞では個々が独立し、ユニゾンまたは同時多発的なソロパートを主とする。

音楽が途切れ、舞台両端にいる男女が浮かび上がる。笛の音に互いが引き寄せられ、ゆっくりと歩み寄る。二人のダンス。水の中で揺らぐように互いに影響し合い、自由でかつ関係性がある。ターンとリフト。組を増やして舞台全体で踊り、次第に去っていき最後に笛の音と笛だけが残る。

② S・N

私は、太安万侶が編纂した「古事記」の上巻を元に、「あめつちのはじめのとき」と題して、美術のコラージュ技法を用いて画集を作ることにした。

「古事記」を選んだ理由は、おとぎ話のような内容で親しみやすかったからである。その中でも、天地開闢から様々な神話が生まれ万物が創造されていく上巻の説話を元に、無からの世界の創造または、破壊と再生を繰り返す

返す宇宙を考えながら表現したいと思う。

この、一から世界を、文化を造り直していくという点において、今回の東日本大震災からの復興への希望というテーマが連想されたので、そちらも念頭に置きながら構想する。

まず、はじめのページは、「無」と「混沌」の様子を表す。津波で何もかもなくなってしまったが、大量の瓦礫は静かにそこに存在しているという情景を浮かべる。一枚の真っ黒な紙（「無」を表す）の上に、透ける素材の紙を重ね、その紙に日常の破片を散りばめるように絵の具や糸、布、ボタン、写真の一部等をコラージュする。それで、混沌と無の紙一重を表現する。

それから天地が分かれ、島ができ、国が造られ、万物を生む神々が生まれる。これは、亡くなった方々をしっかり天に送り生きている人々は地を踏みしめるイメージで、再び町が戻っていく様子を思い浮かべる。青空の写真やキラキラした薄い布、空に手をかざす手や地を踏む足の写真、砂利、初めの瓦礫の材料などを使って徐々に復興していく様子が表せるように何枚も画面を作りたい。

最後に伊耶那美の死による国産みの中断（復興の妨げ）と伊耶那岐の黄泉の国での穢れを禊で落とし、天照大御神などを生んだ所を、原発と放射能汚染という穢れを禊ぎ、本当に晴れ渡る青空を被災地に見るという景色に例える。これも暗→明を基本に工業的な素材と透明感のある素材を用いて、最後に希望が見られる絵を作りたい。

[注]

- 1) 演劇部の大会は、都道府県により若干の違いはあるが、概ね地区大会（市区町村がいくつか集まった「地区」の出場希望校全部が上演する）から推薦された学校が各県の県大会に出場し（たとえば東京都の場合は6つの「地区」から各2校が推薦される）、さらに上位2校に入った学校が地方別のブロック大会に出場し（たとえば東京都の場合は原則2校が関東大会に推薦される）、さらに各ブロック大会から1～3校が全国大会に推薦されるというシステムになっており、全国大会出場校は日本全国でわずか12校である。
- 2) 2010年度にも、3年生の2学期に予備実践的に同様の授業を実施したが、この際は実施時期が遅かったため、新しい文化の創造に関する課題は課しておらず、謡曲「黒塚」から「黒塚 Sept.」への脱構築のありようを分析するのみで終了した。ただしこの時の分析の様子を見て、翌年度の1学期には今回の授業を実施できるという感触を得た。

[参考・引用文献]

- 浅田孝紀（1992）「古典教育の意義に関する一考察」『日本語と日本文学』第17号 1992.9 筑波大学国語国文学会 pp.左1～左10
- 浅田孝紀（1995）「「古典を楽しむ」ために一知的好奇心を喚起する三つのレベルをめぐる一」『月刊国語教育研究』第274号 1995.2 日本国語教育学会 pp.22～27
- 浅田孝紀（2000）「「言語文化教育」という観点一言語教育における一視座の提唱一」『月刊国語教育研究』第338号 2000.6 日本国語教育学会 pp.56～63
- 西尾実（1951）『国語教育学の構想』1951.1 筑摩書房 pp.124～131
- 藤原与一（1963）「文化創造と国語教育」『国語教育研究』第8号 1963.12 広島大学教育学部光葉会 pp.425～433

[付記]

「黒塚 Sept.」のビデオの使用については、原澤毅一氏より個人的に許可をいただきました。記して感謝申し上げます。